

## 5 1 【やましい】

あるとき、こう懐爺にききました。

「せんせいが、しかるときさ、かならず、やましいことはないか、というんじやが、あれはどういういみかのう」

「そうですか、それは、おまえは【やましい】というおぼけに、とりつかれていないかどうか、それを確かめているのでしょうか」

「おぼけのことを、きいとるんか」

ぼくはあきれました。

(せんせいもおぼけのことを、きにしているんだ)

「【やましい】というおぼけは、もともとは、たましい、だったのですが、突然変異（とつぜんへんい）で、[た]が[や]になってしまいました。それからは、【やましい】というおぼけになって、大活躍しているのです」

「だいかつやくかのう。それはすごいもんだのう」

「金ちゃんにはまだ難しいかもしれませんが、人間が進化すればするほど、【やましい】というおぼけが活躍するのです。これも【やだやだ】とおなじく、人間のなかに棲むおぼけです」

「わしも、しんかしたら、【やましい】にやられるのかのう」

「それは、やられます。現代人で、やられない人間は、ひとりもいません」

「かいじいは、やられたことが、あるんか」

「わたしなんか、自慢（じまん）じゃありませんが、いわば【やましい】の巣（す）ですね」

「たいじ、せんのかい」

「【やましい】は退治しても退治しても、いえ、退治しようとするほど、増殖（ぞうしょく）するおぼけです」

「おそろしいのう。まるで、ばいきんじやのう」

「黴菌には最近、抗生物質という、黴菌退治の薬が開発されました。けれども、【やましい】には特効薬がありません」

懐爺は、あわれな顔つきをしました。

「かいじいは、あわれじやのう」

「それでも、人間が死ねば、その人間にとりついた【やましい】も死に

ます。待つしかありません」

「そうかい。ばかはしななきゃなおらない、って、あいつかい」

「似ていますね。でも【やましい】は、莫迦にだけはとりつきません」

「そんならわしも、ばかになりたいのう」

「そうですねえ」

懐爺はまた、あわれな顔つきをしました。

ぼくか、懐爺自身か。

どっちを、あわれにおもっているのか、よくわかりませんでした。